

3. 「子」は男子の美称と解され、敬語である。それが、先生に対する敬語にも使われるようになった。今の学校とは異なり、孔子のところでは先生は孔子一人だけであるから、ただ「子」といえば孔子であった。「曰」は口を開いて言うことである。昔ある講習会で『論語』を講義したとき、なぜ日(ひ)の字を「いわく」と読むのですかと質問された。「日」は太陽の象形字であり、細長く書き、「曰」は口を開いて声を出している形で、左肩の部分を着けずに少しあけて書くのが正しく、横長に書き、両者は全く別の字である。「子曰」とは、孔子の言葉を門人が記録したからで、「先生がおっしゃった」という意味である。昔は「子曰」を「子のたまわく」と読んでいた。それは孔子を尊んで丁寧な言い方である。しかし、明治45年3月の官報に載った漢文の読法には、敬語は我が皇室に関する場合の外は用いない、と書いてあるから、「のたまわく」と読まず、「いわく」でよらしい。

4. 次に少し先に行くが、ここに「説」と「樂」とがある。孔子というと何か道德のかたまりで、四角四面な人と思いがちであるが、孔子はそんな人ではない。人生に悦びと楽しみとは欠くことのできないものであり、それなくしては生きた甲斐がないと思っていたのだと思う。決して悦樂を否定するものではないが、悦や樂の中には金がかかるものや不健全なものもある。この章は人の気づかない悦と樂とを語ったものと思う。

5. 「説」を「悦」と同じく「よろこぶ」と訓むのは、古代は文字の数が少なく、「説」の字は「セツ」と読む「説明」の意と、「エツ」と読む「喜ぶ」意との両様に使われていたからである。後世、喜ぶ意には「悦」の字が作られた。

6. 「学而時習之、不亦説乎」を「学問勉強して、それをいつも復習することは喜ばしいことだ」と解するのがあるが、いったい、学問に喜びを感じずる人は、この世の中に何人いるだろうか。とても普通人のできることではない。「まなぶ」という語源は「まねぶ」、つまり、まねをすることである。趣味でもスポーツでも、習い初めは上手な人のまねをすることである。例えば水泳でも、手はこう、足はこうと教わり学んでも、すぐには泳ぐことができない。それを、繰返し練習しているうちに、今までできなかったことができるようになる。その喜びは心の底からこみあげて来るもので、金銭では買うことができない。だから「不亦説乎」、なんと喜ばしいことではあるまいかと言っているのである。何事でも、ただ教わり学んだだけではうまくできない、繰返し練習することによって自分のものとなる、その喜びを指摘してくれたものと思う。「時」は、機会あるごとにと解し、常にと解しているがどちらでもよい。

7. 「有朋自遠方来」を「朋有り...」と読むのがあるが賛成できない。古代の辞書の『説文解字』に「有不_レ宜_レ有也」(有とは有るべからざるなり)と解しており、めったにないことがあった意である。遠く離れて何年も会わない友達が珍らしく訪ねて来た。何と楽しいことではあるまいか。人生の楽

しみは良き友を持つことである。社会人になってから、学校時代の友達と会うことは本当に楽しい。同級会や同窓会には、つとめて出席するように心がけたいものである。

- 8 . 「人不知而不愠、不亦君子乎」の「愠」は心の中でムツとすることである。「怒」が顔や態度に表れる怒りであるのとは違う。「君子」は『論語』の中で 2 種類の意味に使われている。(1)は教養あり人格のすぐれた人。(2)は地位・身分の高い人。ここは(1)の意味である。
- 9 . 学んで習うことに喜びを持ち、めったに会わない友と会うことを楽しみとし、世のため人のためになるように働き、例えば職人さんならば使う人の身になって手抜き物は作らず、商人ならばごまかしをせず、曲がったことは少しもしないで正しく生きている。しかし、それを人は認め知ってくれない、いやそんな正直な人はかえってボロ儲けをすることはできずして経済的には恵まれないことが多い。それでも腹を立てない。なんと立派な君子ではあるまいか。「君子」は『英訳論語』ではゼントルマンと訳している。英国のゼントルマンは家柄が良く名門の大学を出なければならない。しかし、ここの君子はそんなものではなく、学歴もないただの市民の中に、このような君子がいる。われわれの周囲にも注意すればここにいう君子がいるはずである。
- 10 . 孔子は少しもむずかしいこと、実行しにくいことを言っているのではない。この章こそ『論語』の開巻第 1 章にふさわしい章である。

P144 ~ 148

【コメント】

規範教育が叫ばれる中、論語教育は大ブーム。論語の第一歩、第一章ほど味わい深いものはない。漢文研究の第一人者原田種成先生の解釈は興味が尽きない。

- 2010 年 1 月 19 日 林明夫記 -